



巻頭言

## 日本の研究の特質と現状

●  
**廣田 襄** Noboru HIROTA  
京都大学 名誉教授



科学に国境はない。しかし、科学者には自分の属する国があるから、その影響を受けて科学にも国によって異なる特質が生まれる。イギリスの物理学者で社会と科学について多くの著書のある John Ziman は、1976年に“*The Force of Knowledge*” (邦訳『社会における科学』草思社、1981年)の中で、多くの分野で日本の科学は高い水準にあると評価した上で、次のように書いた。「日本の研究の特質が、慎重な観察者、熟練した職人、勤勉な技術者、色々な知識をもった批評家のそれであることは特筆に値する。日本人の学究生活は、地理上、言語上の障壁に守られて、アメリカ人の知的社会の非形式主義や自発性には染まらずに、明らかに芸術的、直感的、思索的な研究のスタイルにはあまり重きをおいていない」(松井卷之介訳)。そして、「高い基準の職人的技能と批判精神というものは、将来の科学の達成のための基礎としてはそう役に立たないものでもない。」と結んだ。

私はアメリカの大学で、大学院生、ポスドク、教授として17年間を過ごした後に、1976年に京大理学部へ赴任して、日米の大学の違いを色々と実感した。その1つは、日本の大学の講座制のもとでの研究者の上下関係の意識の強さと講座の閉鎖性、それによる研究者間の自由な交流の欠如であった。Zimanの指摘のように、アメリカの大学での非形式主義や自発性に欠け、教育・研究に関して自由な雰囲気は十分でなく、異なった分野や年齢の教官が親しく交流できる場や機会が少ないと感じた。しかし、十分でないにしても講座費によってある程度の研究費が保証されていた日本のシステムには、アメリカのシステムにはない安定性と自由度があると感じた。私は、日本の教育・研究の環境を改善し、日本の研究の特質を生かし、アメリカ的な良さも取り入れて、真に一流の科学の創造を目指せないものかと思った。

それから40年以上が経過した。その間にどのような変化があったであろうか。20世紀の最後の4半世紀に日本の化学は躍進して、21世紀の初め頃には世界の化学において重要な地位を占めるに至った。それには日本の研究の特質が役立ったと言えるであろう。しかしながら、現在は日本の研究力の低下が深刻な問題として憂慮される状況に至っている。どうしてこのようなことになったのであろうか。

2000年頃に大学院の重点化、国立大学の法人化と次々に大学改革が行われた。研究費に関しては競争的資金が増え、「選択と集中」の政策が進められた。その結果、一般には自由に使える講座の運営交付金は減少し、競争的資金がなければ研究ができない状況になってきているようである。教員は厳しい研究費獲得競争の下で短期的な成果を出すことに追われ、雑用が増えて研究に専念できなくなっていると聞く。過度な競争主義に日本的な形式主義の悪い面が加わって深刻な事態を招いたように思われるが、この状況を何とか変えたいものである。

© 2019 The Chemical Society of Japan